

2020 年度支部活動【北陸支部】

「外国につながるのある児童生徒の学習支援—地方の取り組み—」 開催報告

主催：公益社団法人日本語教育学会

開催日：2020年11月7日(土) 13:00~16:00 会場：オンライン (Zoom)

参加者：70名 (会員 30名・一般 40名)

今回のイベントの参加者受付では、当初予定枠の定員 50 名が 1 日かからずに埋まってしまい、参加地域も北海道から沖縄まで、また海外の方も 2 名と幅広いエリアに渡っていました。これは、とりもなおさず、外国人児童生徒への支援というのが全国共通の関心事であるということでしょう。

本イベントは、第 1 部が 4 件の話題提供、第 2 部がブレイクアウト・セッションという構成でした。

第 1 部最初の話者提供者の長島ヒデキさんは、直前に参加できなくなり録画での発表でしたが、「日本で生まれ、日本で育ち、日本で学校へ行き、日本の学校教員を志す日系二世の私の心の中」というタイトルのもと、母語のポルトガル語はあまり話せないのに外国人として日本で暮らす子供の視点から、家族や学校教員との関わりの中で自身のアイデンティティや将来像を模索する様子を赤裸々に語ってくれました。「どんな子にも、信頼できる存在で安全基地となれる教師を目指したい」との言葉が、彼が葛藤の中で学び、掴んだ生き方を象徴していました。

続いて、中野博史さんらによる、上越市での教育委員会と小学校、国際交流協会、大学関係者が連携して行っている 27 名の児童生徒への支援活動の紹介がありました。この活動を支える日本語支援員の方々が元学校教員で、学校という組織の内情を理解できていることが成功の秘訣の一つだったようです。また Q&A では、発表者から、外国人保護者に最低限「やさしい日本語」程度を習得してもらえると助かるという意見もありました。

3 番めの話者提供者は新潟県国際交流協会の福永綾さんで、県内の子ども支援者のネットワークづくりに奔走された様子と、それによって外国語での対応もできる電話での教育相談窓口が設置されて個別の進路ガイダンスができるようになり、その結果、問題状況が把握しやすくなったこと、そして支援者のための研修の機会が増加したことなどの成果が報告されました。しかし、行政機関、特に教育委員会や学校現場などがあまり参画できていないことと、高校生以上の支援が今後の課題となっていることが指摘されました。

最後に新潟で日本語指導にかかわる佐々木香織さんが、在日外国人の父親から児童相談所を通して幼児兄弟を預かり、里親として過ごした 1 年について語られました。就学前で母語も日本語も未発達な中、ダブルリミテッドを避けるための努力、読み聞かせに対する子どもの興味、また母語話者である親としての権力性への気づき、そして人がいかに社会・人間関係の中から言葉を学んでいるかなどについて話されました。

第 2 部は、10 グループに分かれてのブレイクアウト・セッションの時間で、他グループの議論の様子も情報共有できるように padlet を利用して、4 つの話題提供に関する感想や日頃の疑問などについてのディスカッションが行われました。

今回のイベントでは、第 2 部の時間配分などにもう少し工夫が必要なようでしたが、初のオンラインでも特に大きな支障なく開催できたことに安堵しています。この場を借りて、参加者の皆さま、そしてご協力くださった関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

(報告者 支部活動委員：札野寛子・中河和子 支部活動運営協力員：足立裕子・池田英喜・有田佳代子)